九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

最末期〈膝栗毛もの〉合巻の一受容実態考 ： 『弥次北八横濱久里毛』・『横濱栗毛／二編』の絵組と本文齟齬現象をめぐって

康，志賢
全南大学校 ： 教授

https://doi.org/10.15017/2202927

出版情報：語文研究. 124, pp.34-43, 2017-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

最末期〈膝栗毛もの〉合巻の一受容実態考

――『弥次北八横濱久里毛』・『横濱栗毛／二編』の絵組と本文齟齬現象をめぐって――

康　志　賢

＊

安政期の魯文作〈膝栗毛もの〉合巻類を年次順に整理すると、安政二（一八五五）年に滑稽本風の合巻ⓐ『東海道中栗毛弥次馬』、安政三年にⓑ『岐蘇街道栗毛弥次馬』、同三年夏にⓒ『成田道中膝栗毛』、翌四年春にⓓ『大山道中膝栗毛』とⓔ『甲州道中膝栗毛』とⓕ『江之嶋詣栗毛後馬』（改題後印本『江の島栗毛』、改題再板改刻本『滑稽ひざくり毛』）、同四年か翌五年にⓖ『両国八景荏土久里戯』（改題後印本『両国江戸栗毛』）とⓗ『日光道中膝栗毛』、同五年か翌六年にⓘ『両国江戸栗毛』（改題後印本『東京膝栗毛』）、それから安政七（万延元）年に合巻風の錦絵ⓙ『東海道中栗毛弥次馬』（小判58枚）と連なる。[注1] この後を追うように、二代目岳亭作〈膝栗毛もの〉合巻[注2]が続くわけだが、その中で本稿は次のⓚⓁを取り上げることで、出版文化史の面から、最末期〈膝栗毛もの〉合巻の一受容実態に迫ることを目的とする。

詳しい書誌学的考察は別稿[注3]を期すが、先ずⓚ『弥次北八横濱久里毛』は、柱題「旅日記」・「弥次下」、上下の二巻合綴全三十丁、岳亭春信作・一恵斎芳幾画、万延元（一八六〇）年十月改、品川屋久助板、中本（17.8×11.8）と纏められる（底本は蓬左文庫所蔵の尾16・355）。以下、論の便宜上、柱題「旅日記」のⓚをⓚ-1とし、柱題「弥次下」のⓚをⓚ-2と細分する。

次にⓁ『横濱栗毛／二編』は、柱題「毛二」、上下の二巻合綴全三十丁、岳亭春信作・一恵斎芳幾画、文久元（一八六一）

年四月改、品川屋久助板、中本（17.2×11.5）である（底本は早稲田大学蔵のへ13-03534と神奈川県立図書館所蔵のK97.1-22）。[注4]

さて、ⓚ-1、ⓚ-2、Ⓛは前編・後編・続編とも称すべきシリーズ関係にありながら、柱題の相違、後編の丁付の不自然さ、改印の欠という、不具合が体裁上表れる。[注5] 実は、体裁上のみならず内容上の不具合、いわゆる絵組と本文の不整合現象もみられるのである。改題再板改刻本『横濱ひざくり毛』も板行されるくらい、一〈膝栗毛もの〉合巻として人気作であったという文学史的位置が与えられる当該作である。にもかかわらず、このような矛盾を抱えるという作品の内実・実態解析に努めることで、文学的価値のみでは計れない享受史も存したことを報告したい。

＊

草双紙における絵組と本文の一般的な相互関係――本文ストーリーに沿って絵組を置く――に従って構成されている、ⓚ-1の梗概からみよう。三ウ・四オ［よみはじめ］以降が本文に当たり、本文最初の絵組は江戸八丁堀の長屋で火鉢を囲んでいる「喜多八」と「同じ長屋の左治兵衛」と長屋の住人「おかな」婆さん。ストーリーは、弥次の世話にて女房をもらうことになった喜多八、女房を置いて長旅はできないので近場の「よこはまへゆくのだから、いつものばかげた、みちくさをしてあるひても、五六日とはかゝるまい」と考えた彼の所へ嫁が来る一悶着が、本文九オまで繰り広げられる。この江戸八丁堀の長屋から「日本橋→高輪の大木戸→鈴ヶ森→大森のやまもと→六郷の渡し場」を舞台にする滑稽譚で本文は終わる。[注6] 因みに、狂歌は二首のみ詠まれる（「当世は可笑しくねへさ」〈九オ〉と、今は狂歌が流行らないので詠まないと弥次の口を借りて表明される）。冒頭部の嫁入り茶番は全六丁に渡る長い話であるが、その後は大体一丁毎の短い話で、話柄は一九の『東海道中膝栗毛』原話と無関係である。こうして絵柄も本文に相応して描かれるのである。

このような本文ストーリーに沿って絵組を置くという草双紙の大原則が、ⓚ-2とⓁでは混雑の様相を帯び、様々な不整合を導出し、齟齬を来す。

1．本文ストーリーと関係ない絵組の挿入

ⓚ-2から絵組と本文の一般的な相互関係が崩れはじめる。話柄（一九作原話とは無関係）も大体二、三丁に渡る長い話

が多い。狂歌は一首も詠まれない。

梗概を通して考察しよう。六郷の渡しを渡り、川崎も越して、生麦辺で買った蛇の目寿司を食べ歩く（一オ）。これに該当する絵組は上巻ⓚ-1巻尾に前出されたので、一オの絵組は小坊主を連れ歩く坊主という旅の風景を描いており、本文と無関係といえる。神奈川の茶店で見知りの俳諧師と出会った弥次は滑稽に自己紹介し、親分の一九が死んだことまで滑稽に紹介する（一ウ・二オ／二ウ・三オ）。これは絵組も相応する。富士の人穴を通り過ぎ、保土ヶ谷の棒鼻から横濱道に入る。本道でない田圃の畦道を歩く喜多八に怒った百姓が突き飛ばし泥だらけになる（三ウ・四オ／四ウ・五オ）。吉田橋で着替え、横濱の吉原町に入る（五ウ・六オ）。以上の三丁分の絵組も話柄に相応する。若い者と出鱈目の阿蘭陀言葉で喧嘩になって啖呵を切って負ける弥次（六ウ・七オ／七ウ・八オ／八ウ・九オ）。この長い話柄に該当する絵組は五ウ・六オ／六ウ・七オであって、全三丁分の本文に対して絵組は二丁のみで省略される。七ウ・八オの絵組は本文と無関係で、「吉岡」の茶屋に案内される花魁と作者岳亭を表象する遊客の道中を、見物する唐人と西洋人が描かれる。

大門に着いた弥次は籠かきに仕返しの狂言を説明して頼む（九ウ・十オ／十ウ・十一オ）。該当する絵組は前掲の八ウ・九オであるので絵組を一部省略したことになる。最前の若い者・でこ助が勤める亀岩楼に上がった二人。顔、鼻、目、体、手足全てが丸いおこねという遊女が弥次の相方になる（十一ウ・十二オ）。該当する絵組は前掲の九ウ・十オ。十ウ・十一オの絵組は本文と無関係で半籬越しに遊女を冷やかす素見客の西洋人と唐人が描かれ、十一ウ・十二オの絵組も本文と無関係で天水桶が載る遊女屋の向こうの海に蒸気船が浮かぶ。相方てこね（「おこね」から表記が変わる）は十四歳にして同じ長屋の弥次に江の島で置き去りにされて以来遊女に売られたのだから、身代金をくれと弥次の胸ぐらを取り、大尽の振りをして若い者に仕返しをしようとした計画も身元がばれ無駄になる（十二ウ・十三オ）。絵組も相応する。それと知らず約束通りに訪ねて来た籠かきに大尽扱いされお小遣いをせびられるが、事情が知られ恥をかいた弥次は、暗いうちに早々と亀岩楼を立つ（十三ウ・十四オ／十四ウ・十五オ／十五ウ）。該当する絵組は十三ウ・十四オ／十四ウ・十五オで、十五ウの絵組は本文と無関係に描かれる。この巻尾（十五ウ、名壺に「岳亭春信戯作／一恵斎芳幾画」）は「……なにありかてへものかと、話しのかたの通ざれは、きだ八、ひとりの駕籠かきを、脇へまねぎ、やう〳〵に訳をいふて、後は笑ひに恥を残し、まだ暗きに、この屋をたちいで、本町通り（横浜）

を見めぐらんと、ふたりはそこ〳〵に支度をなし、暇を告げてたちいでける。めでたし〳〵〳〵」とあって、その絵組は本文と関係なく、的が描かれた障子の傍で見送る体の女性が立ち、岳亭の紋様が付いた黒羽織を着した、頭でっかちの福助人形風の男性が見送られている。

斯くの如く、ⓚ-2における絵組と本文の不整合する第一原因は、本文ストーリーと関係ない絵組を置くことであった。それは㋐横浜という場所柄有り得る絵組の挿入で、以上のⓚ-2では、花魁の道中、素見、町の鳥瞰図という所謂「横浜浮世絵」に値する絵柄の挿入であった。当該ⓚ-2は事件一つに大概図像一つという構図を取るので、数丁に渡る長い事件の場合、本文とは無関係だが、事件の展開する舞台から逸脱しないように、横浜、就中横浜の遊郭を表象するような「横浜絵」を挿入することで、場所柄の新奇さも手伝って販売戦略上有利であろうという作者、或いは板元の企画意図があったと察せられる。

続くⓁでもその企画意図は継承され、本文ストーリーと関係ない横浜絵として、①弥次喜多混じる群衆を呼び込む見世物小屋の前の若い衆（十一ウ・十二オ）や、②馬に乗った西洋人に驚く弥次喜多（十四ウ・十五オ）が描かれる。しかし、前作ⓚ-2では見られないⓁにおける本文ストーリーと関係ない絵組の特徴として、㋑当該作には登場しない何か他の事件に基づいているような絵組（弥次喜多の服装は本筋と一致）が挙げられる。①赤ちゃんを負ぶった子供が弥次の案内をし、喜多の後をお爺さんが付いてくる（十五ウ・十六オ）、②芝刈りのお爺さんに倒される喜多（十六ウ・十七オ）、③弥次と他の旅行客との喧嘩を止める喜多（二十八ウ・二十九オ）、④滝壺で水を浴びている体の喜多と水泳中の弥次を、室内で眺める留袖の女性（二十九ウ・三十オ）という絵組は本文と関係ない。これらの挿入によって、前作ⓚ-2より一層Ⓛの絵組と本文の不整合現象が甚だしくなるのである。

2．図像化の有無

以上の本文ストーリーと関係ない絵柄の挿入が、本文と絵組の不整合する第一原因ならば、第二原因は「図像化の有無」による。

2-1．図像の脱落

ⓚ-2で若い者と出鱈目の阿蘭陀言葉で喧嘩になり啖呵を切って負ける弥次（六ウ・七オ／七ウ・八オ／八ウ・九オ）という、長い話柄に該当する絵組は五ウ・六オ／六ウ・七オ

であって、全三丁分の本文に対する絵組は二丁分と省略される。また、大門に着いた弥次は籠かきに仕返しの狂言を説明して頼む（九ウ・十オ／十ウ・十一オ）が、これに該当する絵組は八ウ・九オのみであるので、これも絵組を一部省略したことになる。

続くⓁの「……ふたりは楊弓場へ入ると、十七八の娘」が おり、滑らないように指に付ける粉を、矢が当たる呪いと思って嘗めては恥をかき、弥次の矢は全く当たらないと、本文は四ウ・五オ／五ウ・六オ／六ウ・七オに渡って展開するが、該当絵組は三ウ・四オのみ、つまり全三丁分の長い逸話に絵組は一丁のみである。酒肴を取り寄せ、娘が三味線を弾こうとして木のばちが無いと言うので、団子をこねる木鉢を買ってきた喜多八、という本文は七ウ・八オ／八ウ・九オだが、該当絵組は四ウ・五オのみ。鎌倉建長寺の太鼓を見てから、そんかく寺の釣鐘を突き代を出して力自慢しようとした弥次は音色が出せずひっくり返るばかり、という本文は二十ウ・二十一オ／二十一ウ・二十二オ／二十二ウで、該当絵組は二十一ウ・二十二オのみ。「尼寺にいたり、それより七里ケ浜にいづるに……ごなんの牡丹餅」するからという子供らに銭をやったら、「波に飛び込み、浜砂の上を転げて、生け捕った荒熊」のような姿となって見せる、という本文は二十三オ／二十三ウ・二十四オ／二十四ウ・二十五オで、該当絵組は二十二ウ・二十三オのみ。藤沢の宿にて冨士講の先達とほらを吹いたので招かれ、講中の後ろに座り、「口を開ひたり塞ひたりしてゐるを、宿の飯盛りあまた覗いてゐて、二人がにせ口誦を見付け笑ふ」話が二十六ウ・二十七オ／二十七ウ・二十八オ／二十八ウ・二十九オに展開し、該当絵組は二十六ウ・二十七オのみ。このようにほぼ全三丁分の長い逸話に絵組は一丁が宛がわれるという、図像の脱落、ないし省略が前作ⓚ-2の二例に比してⓁは五例で、絵組と本文の齟齬現象が更に著しくなるのである。

猶、前作ⓚ-2では見られないⓁにおける絵組と本文の不整合する原因として、完全なる「図像の脱落」が挙げられる。絵柄として捉え難い場面（雑談、夢物語など）は、長い本文にも関わらず全く図像化されず、該当絵組を置かないのである。よって、逸話（長短に関係なく）一つに絵組一つという構想に破綻を引き起こしてしまう。つまり、見物がてら駄洒落を言い合う、本文三ウ・四オの話柄に該当する絵組はない。また、「上の巻より さてもやじらう兵衛きだはちは、はこね（箱根）のゆまでこぎつけんと、やどやをたちいで」歩きつつ喜多八の夢物語が始まる。日本橋で身投げしようとするおこ

そ頭巾の女を助けたら、新婚早々横浜に行ったきり帰ってこない亭主に捨てられたと思う自分の女房だった、だから帰りたいと漏らす喜多八、という本文は十六オ／十六ウ・十七オ／十七ウ・十八オだが、該当絵組はない。この長い話に相応する絵組がないので、逸話一つに絵組一つという基本構想の更なる破綻を引き起こすのである。

2－2．図像の挿入

以上は絵組と本文の不整合の原因を、「図像化の有無」の中で「無」の側面から考えた次第であるが、逆に「有」の側面からも考えられる。本文には書かないが、弥次喜多の旅行中の出来事として受け取ることも可能な場面を挿絵として描いたり、一丁分に書いた本文に相応する絵組を二丁分あるいは三丁分へと増やして描いたり、本文としては比重の軽い、例えば二・三行に過ぎない短文に当たる場面を絵柄として捉え描き込んだりする場合である。これは事件一つに絵組一つという草双紙の原則を破るものの、ストーリー展開上は矛盾しない図像の挿入である。

証例として先ずⓚ－2の冒頭が挙げられよう。弥次喜多は六郷の渡しを渡り、川崎も越して、生麦辺で買った蛇の目寿司を食べ歩く（一オ）。これに該当する絵組は既に上巻ⓚ－1の巻尾に描出しているので、当該一オの絵組は小坊主と同道する坊主、という旅の風景を描いており本文と無関係といえる。続くⓛではこの「図像挿入」現象が益々激化する。「向かふより南京唐人二人連れ……すれ違ひになりながら、南京の下げてゐる打ち紐の先を、二人共に結」（十ウ・十一オ）んでしまう喜多八、という本文一丁分に当たる絵組は八ウ・九オ／九ウ・十オ。即ち、一丁分の本文に絵組は二丁分なのである。

引いては、一丁に書かれた本文に相応する絵組が三丁分の場合もある。次は本文十八ウ・十九オである。「早くも能見堂に至り、かの金沢の八景も、一目に見渡す雲晴れに、二人は嬉しく（これの該当絵組十七ウ・十八オ）、それより金沢東屋まで、腹の減ったを口合ひに、生け簀の魚ゝ選り好み、様々の戯けをいゝつゝ、この所を立ちいでける（これの該当絵組十八ウ・十九オ）」。続く同本文十八ウ・十九オ末尾と十九ウ・二十オでは、牛かたの誘いで雌牛に乗った喜多八、居眠りをし木鉢笠の重みであおのけに転落する話が連なり、該当絵組は十九ウ・二十オのみである。

これは一丁に書かれた本文に相応する絵組が三丁という、バランスを欠いた構成といえるが、次のように更なる短文を図像化した証例もある。「鎌倉八幡の女体石」（二十ウ・二十一オ）とあるのみの短文に該当する絵組二十ウ・二十一オ、

「ゑのしま（江ノ島）へわたり、いわやにまふで」た喜多八（二十四ウ）という短文に当たる絵組二十三ウ・二十四オ、「藤沢の小栗の塚に詣でる」（二十五ウ）という短文に当たる絵組二十四ウ・二十五オが挙げられる。

一方、絵組二十五ウ・二十六オには道行く富士講の人々に話しかける喜多が描かれる。しかし、この絵組に該当する本文はなく、その夜冨士講の人たちと同宿することになるので、本文に省略された場面の図像化として受け取ることも可能だろう。同じく、絵組二十七ウ・二十八オには面目なさそうな顔で宿を立つ弥次喜多を見て笑う飯盛りたちと宿屋の亭主が描かれるが、この絵組に該当する本文はなく、昨夜の失敗に笑われながらの旅立ちという、本文に省略された場面の図像化として受け取ることも可能である。

3．順番の混乱

以上、絵組と本文の不一致する第一原因を話柄と関係ない絵組の挿入、第二原因を図像化の有無から考察してきたが、第三原因は「順番の混乱」にあると考えられる。これはⓚでは見られないⓁのみの特徴である。

ア．ストーリーの展開上後の事件に該当する絵組を、先に置いてしまう矛盾が見られる。唐人屋敷の裏方にある矢来（やらい）小屋に牛がいて、喜多八がその牛の頭を夢中に掻いてやるうちに、背負っていた風呂敷包みが牛の角に引っ掛かったまま奥に持って行かれてしまう。矢来へ首を入れて牛を呼び付けるものの相手にされず、弥次の助けでやっと引っ掛かった自分の頭を矢来から抜く喜多八。この話柄に当たる本文は十一ウ・十二オだが、該当絵組は六ウ・七オなのである。絵組はストーリーの順番上、唐人の髪を結ぶ絵組（八ウ・九オ／九ウ・十オ）後に置かれるべきだが、随分前に置いているのは矛盾と言わざるを得ない。

イ．同事件の絵組なので続け様に置くべきなのを引き離してしまう矛盾がある。唐人館の様々な瓶の薬品を調合して完成する写真を写真鏡で撮ってもらった弥次は、くしゃみをする瞬間の顔が写ってしまい、渋々と代金を払う。この話柄は十二ウ・十三オ／十三ウ・十四オに渡って展開するが、該当絵組は五ウ・六オ、十ウ・十一オと、同事件の絵組なのに随分離して置くことに制作者側は無頓着なのである。

＊

このような絵組と本文の不整合という混乱が生じた最大の

要因は、一つの事件が長く展開されるのに対して、該当絵組は大体一個しか描かないことで、絵組が該当本文より先立ち、該当本文は溢れて段々遅れていく現象が起きているからだと思われる。この現象は下絵を描く作者も当然認識していたはずで、「○こゝよりゑぐみとほんもんあとさきになるゆへ、見る人よろしくさっし給へ」（Ⓛ五ウ・六オ）とわざわざ書入を添えている。しかし、本文が絵組より遅れるだけならまだしも、絵組の順番を事件の順番とは逆順に置いたり（3．ア）、同事件の絵組二つを連続して置かずに引き離したり（3．イ）、新たな事件が展開されない限り新たな絵組を置かないという原則に拘って、事件と事件の合間に本文と無関係の絵組を置いてしまったり（1．）、最悪なのは本文と無関係の絵組の中で、当該作には存しない何か他のエピソードに基づいているような描き方の絵組を入れること（1．㋑）で作品鑑賞の妨げになることである。[注7]

事件一つに絵組一つという構図は、黄表紙のように丁毎にエピソードが変わるジャンルなら最適であろうが、当該合巻では事件一つが長いことと、絵で捉えにくい事件が展開する（2-1）ことによって、どうしても不足する絵を補充する方法として、作者なり苦心した結果、かくの如く本文と無関係の図像を挿入したり（1．）、本文には書かれないが、彼等の旅程からして想定される場面を図像化したり（2-2）、二・三行の短い本文を図像化したり（2-2）、という方策を講じることになったのだろう。しかし、当該作とは関係ない他の逸話に立脚しているような描き方の絵組（1．㋑）を入れているのは、作品理解を妨げる最大の要因となっており、切り貼りの間に合せの作品であるという謗りをまぬがれにくくしている。本文展開においては矛盾点が見付からず面白可笑しく出来上がっているだけあって、このような絵組の錯綜は惜しまれるところである。

＊

斯くして、万延元年十月にⓚ『弥次北八横濱久里毛』、翌年の文久元年四月にⓁ『横濱栗毛／二編』という合巻を板行した板元当世堂品川屋久助は、Ⓛと同年（次掲ⓝ岳亭自序：文久元辛酉年初秋〈7月〉）に、岳亭作・芳幾画という同じ組にて、合巻風錦絵の揃物ⓙと同名の合巻ⓝ『東海道中栗毛弥次馬』をも板行する。[注8]

結局、ⓚ-1、ⓚ-2、Ⓛは製作を急いだあまり、本文ストーリーと無関係の絵組が後編（ⓚ-2）、続編（Ⓛ）と後になればなるほど段々増えていくことになったのだろう。時間に追

われながら何とか前編・後編を一冊に纏めて同時出版に漕ぎ着けたものの、刊行を急いだ拙速さの感じられるシリーズものになってしまったのである。

しかしながら、内的矛盾を抱えたこれらであっても、Ⓛの翌月の改印（文久元年五月改）を有するⓜ『滑稽・江戸久居計』、ⓜの刊行四か月後の改印（文久元年九月改）を有するⓝ『東海道中栗毛弥次馬』、ⓝの刊行翌月の改印（文久元年十月改）を有するⓞ『弥次喜太八郎東海道中旅日記』と、岳亭作〈膝栗毛もの〉合巻が続いたことに鑑みると、ⓚⓁの趣向は読者に歓迎され、市井の反応も悪くなかったのだろう。そのような一連の岳亭作〈膝栗毛もの〉合巻シリーズ誕生の始原になった人気作がⓚⓁであったのであり、従って、絵組と本文の不整合という内容的齟齬に寛容な、ひいては無頓着であった当時の一受容形態も存したことを垣間見た次第である。

注

注1　詳細は拙稿「魯文作〈膝栗毛もの〉合巻の書誌攷」（『国語と国文学』一一〇五、東京大学国語国文学会、二〇一五・一二）を参照されたい。

注2　関連拙稿としてア.「〈膝栗毛もの〉作品群の書誌――その図様継承史の一環として」（『国語国文』九二三、京都大学、二〇一一・七）／イ.「『東海道中栗毛弥次馬』三種と二代目岳亭の〈膝栗もの〉合巻攷」（『日本文学』七一六、日本文学協会、二〇一三・二）がある。

注3　拙稿「合巻『弥次北八横濱久里毛』・『横濱栗毛／二編』の書誌学的研究」『日語日文学研究』一〇三、韓国日語日文学会、二〇一七・一一

注4　『武相膝栗毛』（神奈川県立図書館協会郷土資料編集委員会編、神奈川県立図書館協会発行、一九八三）にⓚⓁの写真と翻字文が載るが、誤読・振り仮名の欠落・漢字に置き換えない等の理由から、本稿の原文引用は稿者の翻字による。引用文中の太字・傍点・句読点・括弧中は康補記であり、読みやすさを考えて適宜漢字を当て原文は振り仮名として残した（以下同）。

注5　拙稿イ二〇頁で指摘している。

注6　梗概＋三ウ～六オ：横浜旅行をする為には留守居が要るとして、江戸**八丁堀の長屋**で一人暮らす喜多は、今夜弥次の世話で持参金付きの嫁をもらうことになって、同じ長屋の左次兵衛（途中から左次郎）とおかな婆さんに手伝ってもらって嫁入りを茶番にする準備にかかる。六オ～九オ：比丘尼妙心を騙して前垂れを頭に被せて連れ込んだ弥次は、臭い酒を出されては吸い（酸い）ものと言われたり、硯蓋料理の代わりに壊れた硯の蓋を出されたり、騙し合いの結果叩きがねが持参金代わりの比丘尼をもらう喜多であった。九オ～十三オ：婚礼の翌日早速横浜旅行に出る二人。弥次は**日本橋**で出くわした魚屋の半七から昨夜貸した女房の着物を返しもせず逃げるのかと喧嘩になる。**高輪**の大木戸辺ではからかった籠かきを乗せて担ぐことになった二人。**鈴ヶ森**では権八の身振りをする。十三オ～十五ウ：**大森**の山もとという茶屋で山伏と睨めっこをした喜多は、山伏の金玉が外に出たのを見て吹き出して負けたので払いを受け持つ。**六郷の**

渡しの待合い茶屋の裏でいざりの非人二人が相撲を取るのを見物する。

注7　宿屋の留女に引っ張られ上がった宿屋（本文十四オ、該当絵組十二ウ・十三オ）で、重い木鉢の笠で肩が凝った喜多八は按摩を雇う（本文十四ウ・十五オ、該当絵組十三ウ・十四オ：該当絵組が前出され、当該丁には本作内容と関係ない絵組が置かれる結果になる）。

注8　拙稿イで詳論した。

〔付記〕本稿は全南大学校学術研究費（課題番号：2016-2449）の支援によるものである。

（かん　じひょん・（韓国）全南大学校教授）